

グスク時代の土壙墓・石組墓－発掘資料から－

Pit Burial and Rock-walled Grave of Gusuku Period - Excavated Examples -

瀬戸 哲也
SETO Tetuya

ABSTRACT: As well as the other cultural aspects, the burial practices in Okinawa are unique and are different from those in the mainland Japan. The recent excavations of Gusuku-period sites; however, have been recovering the pit-burial and the rock-walled graves that did not appear in the Modern period. Such types of burial show some similarities with the mainland types in form, burial method and site location. This fact indicates that the cultural influence from the east Asian districts including mainland Japan was increased at that time, effecting not only the material culture but also the customary practices such as burial.

1. はじめに

沖縄県の墓制では、一定の間風葬により遺体を白骨化させ、その骨を洗い蔵骨器である厨子甕に納め、掘り込み墓・亀甲墓等に最終的に葬るというのが基本とされる。この墓制は、近世17世紀には広く行われたとされるが、庶民階層までに広がるのは18世紀それも後半になってからだとされる。この墓制の始まりを考える上で最も古い資料として、最近の調査で13世紀後半に遡る可能性が考えられる浦添ようどれがあるが、近世・近代に行われた葬法と完全に同一かどうかは判らない。

それでは、近世の前時代であるグスク時代では、どのような墓制が行われていたのであろうか。近世以降の墓制につながると思われる岩陰などに埋葬し、その骨を集骨する墓制は貝塚時代から引き続いて見られる。一方、近世以降には主流ではない土壙墓や石組墓といった墓制が、類例は未だ多いとは言えないがグスク時代には発掘調査により確認されている。これらの墓制は同時期つまり中世期の日本本土にも見られ、沖縄の墓制または当時の社会を考える上で、非常に興味深いものである。このような認識のもとに、グスク時代の墓制の土壙墓・石組墓を検討することにした。その方法として、まず前代の貝塚時代の墓制資料を概観した上で、次に当該期の墓制について土壙墓・石組墓を中心にその特徴をまとめることとする。最後に、この墓制を日本本土との比較することで、その共通・相違点を浮かび上がらせ、今後の研究の課題を導いて行きたい。

2. 貝塚時代の墓制の概観

グスク時代の墓制を検討する前に、その前時代である貝塚時代の墓制を概観し、大まかな墓制の変遷をつかむことにする。

1) 墓制の概観

貝塚時代の墓制として、岩陰・洞窟への埋葬と、箱式石棺墓・土壙墓が挙げられる。岩陰・洞窟へ埋葬するものとしては、貝塚時代中期（縄文時代晩期）の北谷町クマヤー洞穴遺跡（北谷町教育委員会1989）、伊是名村具志川島遺跡群岩立地区（安里・木下・中村他1979）などがある。これらの遺跡では、改葬や集骨葬が行われている。一方、箱式石棺墓・土壙墓は、貝塚時代中期末～後期初頭（縄文時代末～弥生時代前期）の読谷村木綿原遺跡（当真・上原他1978）、これよりやや時期が古い貝塚

時代前期末～中期中葉（縄文時代後期末～晩期中葉）の宜野湾市真志喜安座間原第1遺跡（呉屋他1989）等で検出されている。この箱式石棺墓については、弥生時代の北西九州からの影響によるものとする意見が多かった。しかしながら、時津裕子は奄美諸島の例を含めて考察しており、南西諸島の箱式石棺墓は九州からの一方的な影響だけでなく在地の要素をより重要視している（時津2000）。

2) 箱式石棺墓・土墳墓

さて、グスク時代の墓制を考える上では、箱式石棺墓・土墳墓、つまり改葬を伴わない土葬墓がより重要と思われる。そこで、この墓制についてその特徴を簡潔にまとめる。

時期的には、箱式石棺墓については先に挙げた木綿原遺跡、真志喜安座間原第1遺跡のようにおおよそ貝塚時代中期である。しかしながら、土墳墓の方は、貝塚時代後期中葉の宜野湾市真志喜安座間原第2遺跡（呉屋他1989）で2基、貝塚時代後期後半の渡名喜島西底原遺跡D地点（当真他1981）で8基と、貝塚時代後期にも見られる。

葬法としては土葬であり、その埋葬姿勢は足を伸ばしたままの伸展葬が多い。また、埋葬施設には土壇のみや、いわゆる箱式石棺、またはおそらく組み合わせと思われる木棺がある。立地としては、集落よりやや離れた場所に数～数十基の墓が営まれ、集団墓地となることが多い。墓群としての構成は、数基の墓がゆるやかな列状の単位として配列されている。現状では、顕著な遺構の切りあいが見られるものはない。副葬品としては、土器や貝製品等が見られるが、各墓に大きな差は見られない。

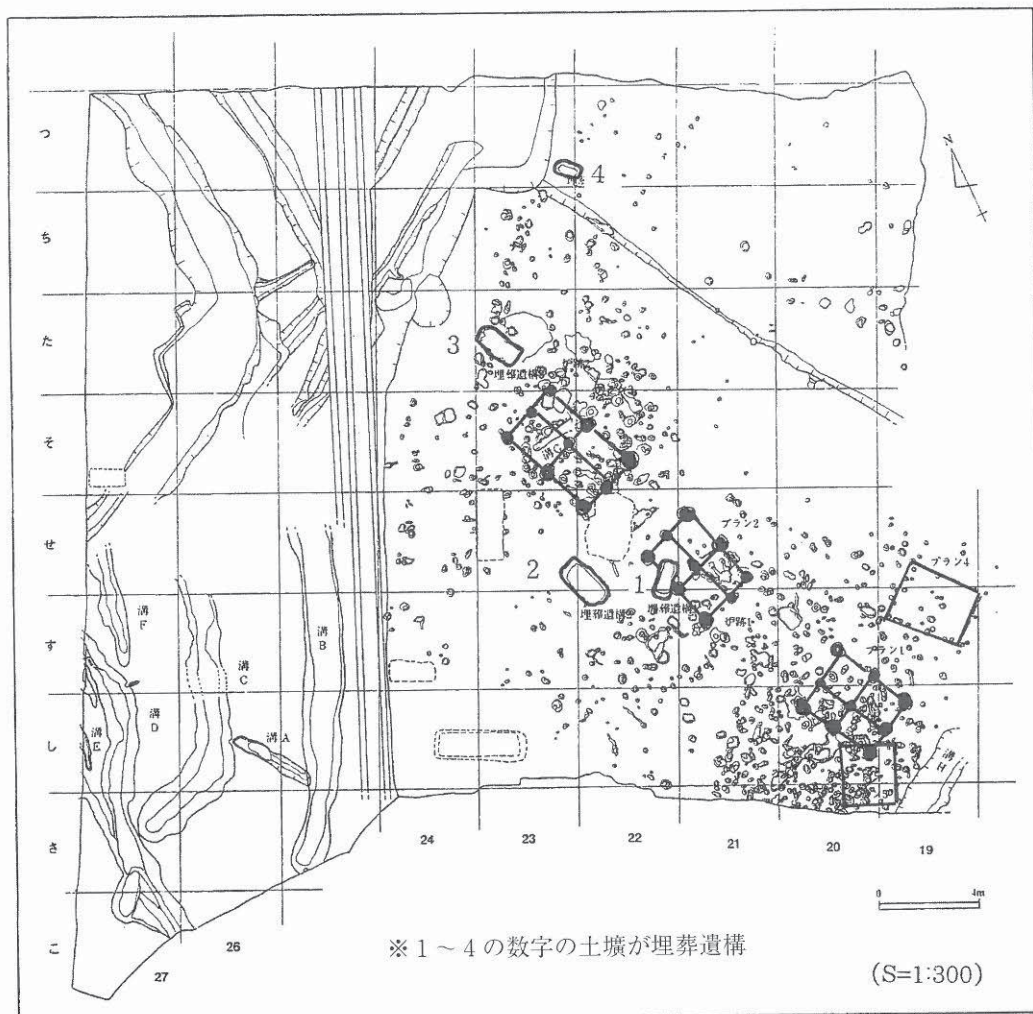


図1 伊佐前原遺跡第9面遺構図（當銘2001一部改変）

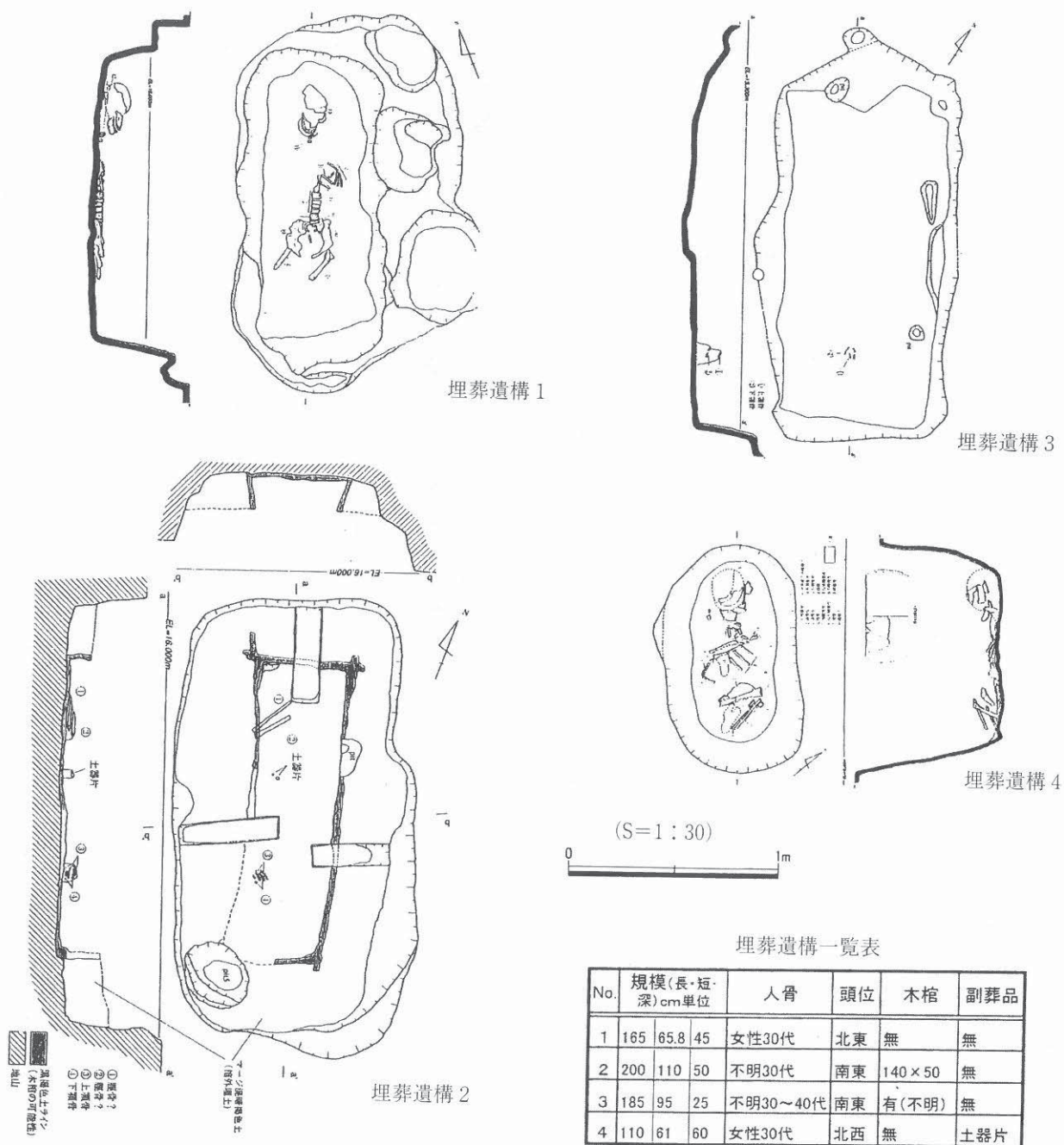


図2 伊佐前原遺跡検出土墳墓（當銘2001一部改変および作成）

また、箱式石棺自体にも大きな個体差はなく、強いて被葬者の階層差を強調するならば、土墳墓との違い程度と思われる。

3) 小結

簡単に貝塚時代の墓制をまとめると、岩陰・洞窟への埋葬と、箱式石棺や土墳に伸展葬による土葬の両者が、少なくとも貝塚時代中期からあった。これらの墓制は両者とも、集落とやや離れた場所に複数基の墓で構成される集団墓地を営むことが特徴である。また、両者とも墓の内容、副葬品等に大きな違いはなく、子供の埋葬も見られるので、集落構成員の通常の墓地という位置付けが妥当と思われる。両者の墓制の違いは、おそらくその集落の立地的な違いが一つの要因と思われるが、被葬者の集団や時期的な差など、これから更に検討する必要があるだろう。しかしながら、真志喜安座間原第1遺

— 28 —

一方、後兼久原遺跡でも、4基の土壙墓が検出されており、墓の内容および建物群との時期（12～13世紀）・位置関係などは同様の特徴を持っている。この遺跡でも、土壙墓を切っている柱穴があり、やはり集落の古い時期と考えられる。他に注目すべきこととして、子供の埋葬が見られる。

グスク時代の土壙墓の特徴をまとめると、屈葬による埋葬であること、集落に近接して営まれること、墓の数が数基でそれぞれは密に隣接することがないこと、建物群と主軸がほぼ同一であることが挙げられよう。このことから考えると、これらの墓の被葬者は集落構成員全体ではなく、その一部の人々である可能性が考えられよう。しかしながら、墓には副葬品はないことから考えると、この土壙墓自体がそれほど顕著な階層差を表しているとも思えない。また、この2例では集落の古い時期にこれらの土壙墓が営まれた可能性があることも注目すべきである。

2) 石組墓

次に石組墓の例として、石垣市石垣貝塚（下地・阿利1993）を検討する（図3）。この石垣貝塚では、15世紀後半ごろの墓が4基検出されている。これらの中で特に注目すべきものは、一辺約5mの方形石組の下層に焼骨が検出されており、火葬墓とすれば興味深い。さらに、3体の人骨が石棺や土壙に屈葬されたものも検出されており、先の石組墓を意識したように位置している。つまり、ここでは土葬および火葬という二者の葬法が見られる。

この墓群は、その東側に柱穴と思われる多数のピット群が見られ、集落に近接している。この石組みを構築するためにはそれ相当の労働力および土地が必要であると思われ、集落の有力者の墓である可能性も考えられよう。この石組墓は先の土壙墓と地域は異なるが、時期的には後出するので少なくともこの時期には階層的に差がある墓が現れてきた可能性も指摘できよう。



北谷町後兼久原遺跡1号人骨（北谷町教育委員会1997）



大阪府西の辻遺跡第9次木棺墓1（福永他1996）

写真1 12・13世紀の土壙墓比較

3) 小結

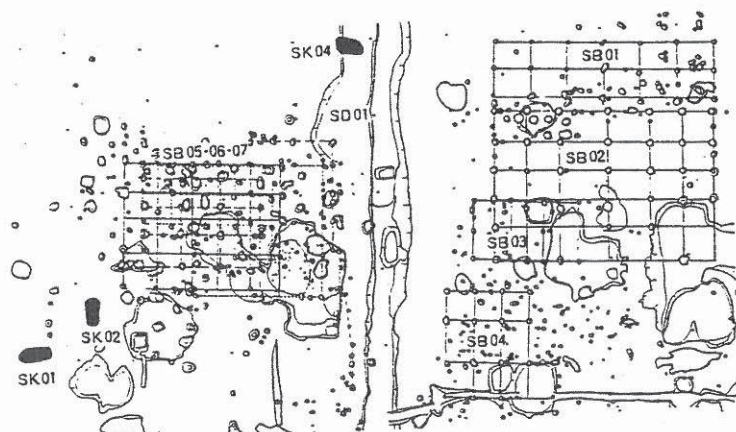
これら土壙墓・石組墓の他にも、14～15世紀の那覇市ヒヤジョー毛遺跡（金武1994）のように岩陰で多数の人骨が埋葬された事例があり、先の貝塚時代および近世以降の墓制と共通したものである。また、この遺跡では、集落より離れており、多数の埋葬が行われる集団墓地であることもそれを裏付ける。

さて、ここまで検討してきた土壙墓は、先の貝塚時代のものと土壙を掘削する点は共通しているが、伸展葬という埋葬姿勢、集落に近接するという位置、各墓が密集しないことなど、異なる点が多い。一方の石組墓については、石組という視覚的な示標を構築する点で現状では前代には全く見られないものである。また、火葬人骨が見られるというのは葬法的にも異なったものが現れたということである。これらの相違点については、周辺地域の一つ日本本土の中世墓との比較を行うことで、よりその特徴を浮かび上がらせたいと思う。

また、浦添グスク、勝連グスクでは城壁の下から人骨が出てくる事例もあり、グスク時代においてもやはり多様な埋葬が見られる。

4. 日本本土の中世墓との比較

前項で見てきたグスク時代の土壙墓・石組墓の特徴をより明確にする一つの方法として、この時期により密接な交流・影響があったと考えられる日本本土の中世墓との比較を行いたい。まずその前に、日本本土の中世墓の概要について述べることにするが、日本本土でも地域によって特色があるのは当然である。しかしながら、中世期の発掘資料が増大している中において、概ねの墓制の変化・傾向については大きな一つの傾向があることが判明してきた（藤澤1995）。ここでは、筆者の管見により具体的な資料は、主に西日本のものを使用しながら、中世墓の概略を述

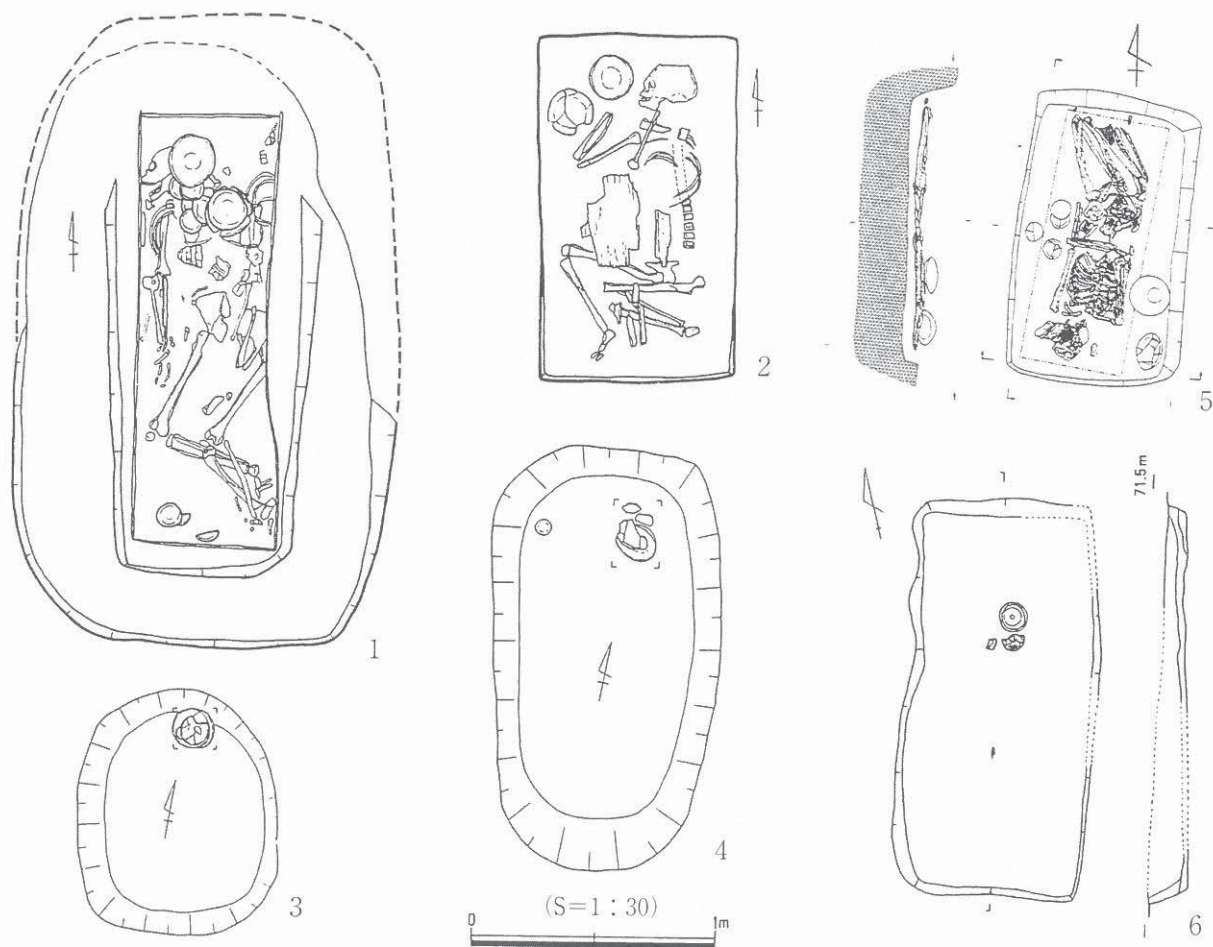


兵庫県福田天神遺跡（橋田1991）



大阪府粟生間谷遺跡（瀬戸1999）

図4 12～13世紀の西日本における土壙墓検出集落



1. 福岡県大宰府学校院地区SX863 2. 同SX864 3. 大阪府日置荘遺跡(その3)土壙墓1
4. 同土壙墓2 5. 大阪府西の辻遺跡第9次木棺墓1 6. 大阪府栗生間谷遺跡(その3)墓3

図5 12～13世紀の西日本における土壙墓(江浦1988・瀬戸1999)

べる。

1) 中世墓の概略

11～13世紀には、集落に隣接して1～数基で構成される土壙墓が、東海・北陸から四国・北部九州、つまり主に西日本各地で広く営まれるが、特に近畿地方ではこの時期の集落では通常検出される。この土壙墓を、文献史学の研究を援用してその集落の開発者が葬られたとされ、屋敷神信仰の現れとして「屋敷墓」と言われる(勝田1988、橋田1991)。また、この時期には集団墓地の事例がほとんど確認されておらず、この屋敷墓の動向と合わせて検討する必要がある。

13～14世紀には、数十～数百基の墓で構成される大規模な集団墓地が形成され、葬法は火葬墓が増え始める。例えば、筆者が担当した大阪府栗栖山南墳墓群では14・15世紀の火葬・土葬の割合は約7:3であり、地域による違いはあろうが、火葬墓が増大する傾向は全国的なものである。そして、16・17世紀には一部の地域を除き、全国的に土葬墓が多くなるという傾向が見られる。

グスク時代の墓制の類例を考える上で、土壙墓と石組墓についてそれぞれ詳細に見ていきたい。

2) 土壙墓

先ほど見たように、グスク時代の土壙墓は、およそ12～13世紀に営まれている可能性が高い。そこで、西日本の中世前期(11～13世紀)の土壙墓、いわゆる「屋敷墓」について概略してみる。

西日本の土壙墓の葬法は、屈葬による土葬で、木棺の使用も見られ、グスク時代のものと形態的に

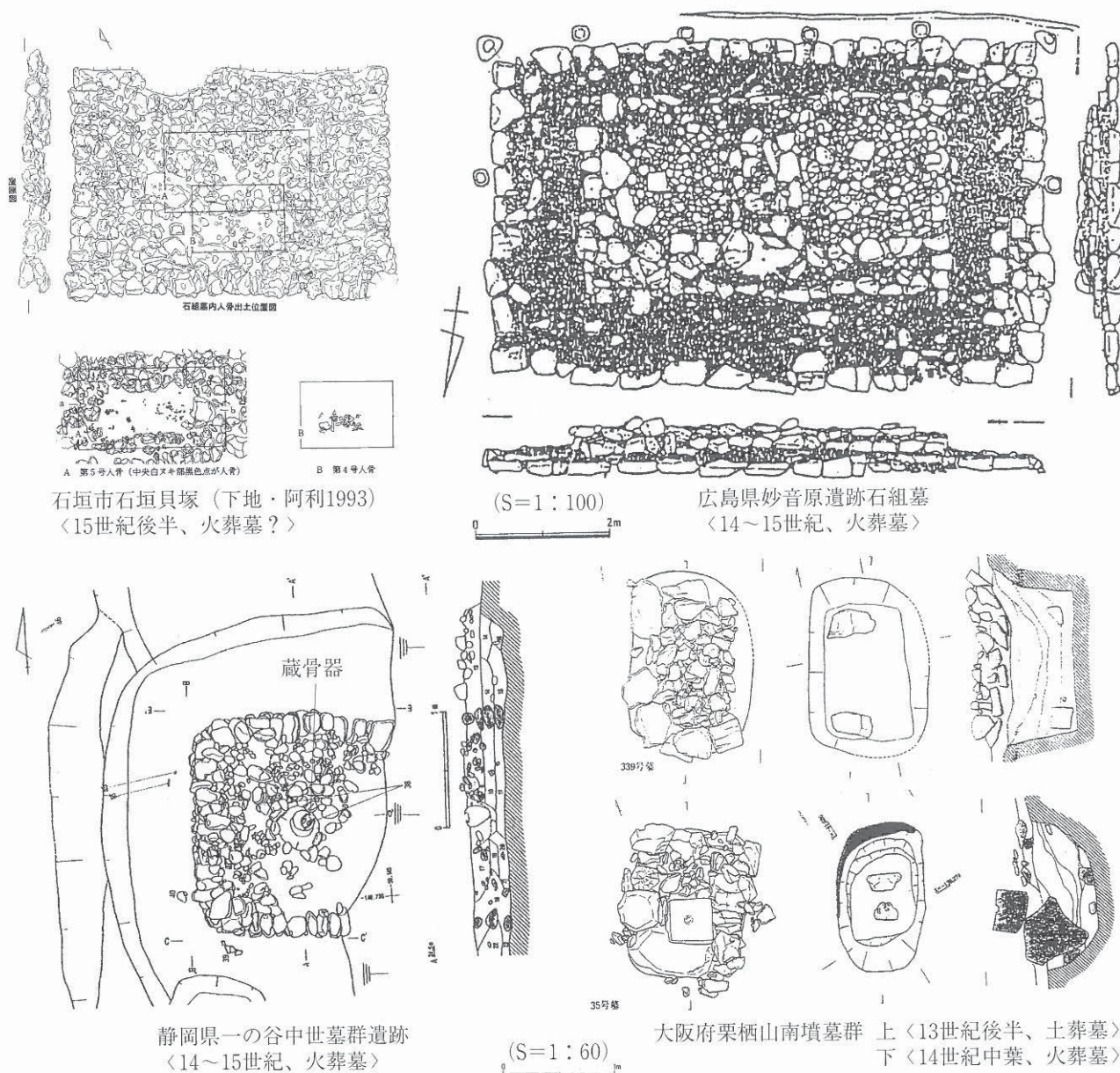


図6 日本各地における石組墓

も非常に類似している（写真1）。土墳の規模で見ると、西日本の土墳墓は1.5～2.0mのものが多く、グスク時代とやはり類似している。その立地であるが、1～数基の墓が近接する建物群と主軸を合わせて営まれる（図4）。墓の時期は、建物群の時期幅に営まれるので、やはりその同時性は指摘されている。また、土墳墓が集落の古い時期に当たるものも見られる。

以上、グスク時代と本州の土墳墓は立地・葬法の点で共通点が見られるということを挙げた。しかし、異なる点としては、副葬品の有無である（図5）。沖縄のものには確実に副葬したという例がない。一方、本州はこの時期の土墳墓には、短刀・和鏡・化粧箱・土師器皿・陶磁器といった品々が副葬されることがまま見られる。ただ、本土のものにも副葬品がない土墳墓はある。

さて、このような本土の土墳墓の位置付けであるが、1集落に見られる墓の数が少なく、青磁や白磁、和鏡などの量的には土器などと比べると少ない品物が埋葬されることから、その集落の有力者の墓と考えられることが多い。

今まで挙げたように、沖縄と本土のグスク時代相当期の土墳墓は、立地・形態・葬法の点で共通性

が高いことを指摘した。しかしながら、この比較は表層的なレベルで留まっており、人骨形質等の検討を経なければ、これらの被葬者を直接本土との関係に触れるのは危険であるのは言うまでもない。ただ、この土墳墓が検出される12～13世紀は、先述の伊佐前原遺跡や後兼久原遺跡、または読谷村ターシモー北方遺跡（仲宗根2001）などで確認されている貝塚時代後期にはなかった画一的な建物群の登場、滑石製石鍋やカムイ焼の出土など、かなり日本本土との交流もしくは影響が見られる時期である。このため、これらの土墳墓も同様の文脈で検討する必要はあろう。

いずれにせよ、数基の墓のみが集落に近接して営まれることは、一部の家族のみ一定の墓制に葬られるという階層的な差が現れてきたことの傍証として見ることはできよう。

3) 石組墓

日本本土では、13～14世紀ごろに石組墓が増大する傾向にある。葬法は、火葬が多いが、土葬のものもある。石組墓には、サイズの大小や、いくつかの石組が連結されひとつの墓になっているものなど様々なものがある（図6）。階層的には、有力農民である名主層から、僧侶、在地領主層まで広く営まれるが、14・15世紀にはより下位の階層（村落構成員・百姓層）まで営まれるようになる。

この視点で石垣貝塚の石組墓を見ると、日本本土のものでも非常に大きな部類に入るといえ、かなり有力な階層の墓と考えられよう。また、土葬・火葬の両者の葬法が行われている可能性があることも、日本本土からの影響を考える上で、非常に興味深いといえよう。しかしながら、この時期の日本本土では集落より離れた場所で集団墓地として営まれる点では異なっている。また、火葬であったとしてもそれが仏教の普及によるものかも不明である。ただ、単純に形態的には非常に類似したものとは言えるであろう。

5. おわりに

ここまで、グスク時代の墓制特に土墳墓・石組墓を、その特徴を本州の同時期のものと比較しながら検討してきた。その結果、これらの土墳墓・石組墓は形態の点では類似したものと言う事が出来よう。特に、土墳墓は集落、建物群との関係、時期といった点でも非常に類似しており、日本本土との様々な交流・影響により登場したことは確実と言えよう。いずれにせよ、貝塚時代と比べると、墓の階層性が現れてきたものであろう。

以上、類例が少ないながら強引な見解を述べてきたことと思うが、墓というその被葬者の階層などを色濃く表すと考えられるものについて、様々な側面から検討することにより、その当時の社会構成を想定できる一つの方法としては有効なものではあろう。

（せと てつや：調査課 専門員）

参考・引用文献

- 安里嗣淳・木下尚子・中村 愿 1979 『具志川島遺跡群（岩立地区埋葬遺構群の調査）第3次発掘調査報告書』
伊是名村教育委員会
- 江浦 洋 1988 「中世土墳墓をめぐる諸問題」『日置荘遺跡（その3）』財団法人大阪文化財センター
- 勝田 至 1988 「中世の屋敷墓」『史林』第71巻3号
- 橋田正徳 1991 「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ
- 金武 正紀 1994 『ヒヤジョー毛遺跡』那覇市文化財調査報告書第26集 那覇市教育委員会
- 呉屋義勝他 1989 『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市教育委員会
- 静岡県考古学会 1997 『静岡県における中世墓』

- 下地 傑・阿利 直治 1993『石垣貝塚』石垣市教育委員会
- 瀬戸哲也 1999 「箕面市粟生間谷遺跡の屋敷墓について」『大阪文化財研究』第16号
- 瀬戸哲也・市本芳三 2001 「栗栖山南墳墓群で出土した石造物について」『日引』第1号
- 北谷町教育委員会 1989 『砂辺貝塚・クマヤー洞穴遺跡』範囲確認調査報告書 北谷町文化財調査報告書第9集
- 北谷町教育委員会 1997 『後兼久原遺跡展』
- 当真嗣一他 1981 『渡名喜島の原始・古代図録』沖縄県立博物館・渡名喜村教育委員会
- 当真嗣一・上原 静他 1978 『木綿原』読谷村文化財調査報告第5集
- 當名清乃他 2001 『伊佐前原第一遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 時津裕子 2000 「南西諸島における箱式石棺墓の再検討」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』
(上巻) 同刊行会
- 仲宗根 求 2001 『ターシモー北方遺跡』読谷村教育委員会
- 福永信雄他 1996 『西ノ辻遺跡第9次発掘調査報告』財団法人東大阪文化財協会
- 藤澤典彦 1993 「夫婦墓の成立と展開—中世墓地成立の画期—」『元興寺文化財研究』No.47
- 藤澤典彦 1996 「中世後期墓地の諸問題」『中近世考古学を語る会』
- 森屋美佐子・瀬戸哲也他 2000 『栗栖山南墳墓群』財団法人大阪府文化財調査研究センター